



映画監督。北宇和郡宇和島町(現、宇和島市)出身。愛媛県立松山中学校(現、県立松山東高等学校)に在学中、後に映画監督となった伊丹万作や、俳人となった中村草田男らと回覧雑誌『楽天』を作り、交流を深めた。松山中学校を卒業後、師と仰いで教えを受けていた劇作家の小山内薫を頼って上京し、万作と共同生活を送り、松竹キネマ(現、松竹株式会社)や帝国キネマで数多くのシナリオを執筆した。

大正13(1924)年、国木田独步原作の「酒中日記」で映画監督としてデビュー。昭和2(1927)年、映画史上に残る金字塔と称される傑作「忠次旅日記」(大河内傳次郎主演)三部作を発表し、一躍映画界を代表する存在となった。大輔は自らの作品で、激しい乱闘シーンや、アメリカやドイツなど外国映画の影響を受けた斬新で大胆なカメラワークを取り入れ、注目を集めた。日本映画草創期にあって、チャンバラ活動写真と呼ばれた時代劇に映画独自の表現方法を取り入れ、また作品に骨格となるべき思想やテーマを盛り込み、「時代劇映画」の確立に大きな役割を果たした。

日本映画草創期にあって、チャンバラ活動写真と呼ばれた時代劇に映画独自の表現方法を取り入れ、また作品に骨格となるべき思想やテーマを盛り込み、「時代劇映画」の確立に大きな役割を果たした。

略歴

- | | |
|-------------------|--|
| 明治31(1898)年10月13日 | 北宇和郡宇和島町に生まれる。 |
| 大正7(1918)年 | 愛媛県立松山中学校を卒業。中学時代より、伊丹万作、中村草田男らと親交を深める。 |
| 大正9(1920)年 | 松竹キネマ附属俳優学校に入学。松竹第1回作品「新生」のシナリオを書く。 |
| 大正12(1923)年 | 帝国キネマ東京撮影所に移籍
関東大震災後、帝国キネマ芦屋撮影所に移籍 |
| 大正13(1924)年 | 第1回監督作品「酒中日記」封切り。 |
| 大正14(1925)年 | 奈良に伊藤映画研究所を設立 |
| 大正15(1926)年 | 日活京都撮影所(時代劇部)へ入る。 |
| 昭和2(1927)年 | 監督作品「忠次旅日記」三部作が封切りされる。
また、傾向映画の先駆とされる「下郎」なども封切り |
| 昭和7(1932)年 | 日活を退社し、新映画社を結成 |
| 昭和8(1933)年11月 | 自己のウエスタン式トーキーの第1作「丹下左膳第一篇」封切り |
| 昭和9(1934)年5月 | 万作、尾崎純と共同の大作「忠臣蔵刃傷篇復讐篇」封切り |
| 9月 | 永田雅一が設立した第一映画社に参加 |
| 昭和23(1948)年10月 | 監督作品「王将」封切り |
| 昭和36(1961)年11月 | 監督作品「叛逆児」封切り。芸術祭賞受賞 |
| 昭和47(1972)年 | 京都市文化功労者に選ばれる。 |
| 昭和56(1981)年7月19日 | 82歳で永眠 |

〈関連図書〉

- ・伊藤大輔・加藤泰『時代劇映画の詩と真実』キネマ旬報社 1976年
- ・『伊藤大輔シナリオ集I~IV』淡交社 1985年
- ・『講座日本映画2 無声映画の完成』岩波書店 1986年
- ・京都府京都文化博物館『伊藤大輔文庫目録』京都府京都文化博物館 1990年
- ・佐伯知紀編『映画読本 伊藤大輔』フィルムアート社 1996年
- ・佐藤忠雄『日本映画の巨匠I』学陽書房 1996年
- ・磯田啓二『熱眼熱手の人-私説・映画監督伊藤大輔の青春-』日本図書刊行会 1998年
- ・朝日新聞社『アサヒクラブ2001/9/4 伊藤大輔と大河内傳次郎生誕百年』朝日新聞社 2001年

〈ゆかりのある場所〉…(P317, 215)

〈関連施設〉…京都府京都文化博物館

〒604-8183 京都府京都市中京区三条高倉 TEL: 075-222-0888